アインシュタインの夢

アラン・ライトマン 著

EINSTEIN'S DREAMS

ALAN LIGHTMAN

浅倉久志 訳

早川書房

アインシュタインの夢

EINSTEIN'S DREAMS

アラン・ライトマン著
浅倉久志訳

早川書房

EINSTEIN'S DREAMS

by Alan Lightman
Copyright © 1993
by Alan Lightman
Illustrations copyright © 1993
by Chris Costello
First published 1993 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
John Farquharson,
a division of Curtis Brown Group Ltd.
through The English Agency (Japan) Ltd.

アインシュタインの夢

1993年3月31日　初版発行
1993年5月31日　再版発行

著　者　アラン・ライトマン
訳　者　浅倉久志（あさくらひさし）
発行者　早川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(3252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-203554-4 C0097
Printed and bound in Japan

アインシュタインの夢

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1993 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

プロローグ

どこかの遠い石造りのアーケードで、時計塔の鐘が六つ打ってから鳴りやむ。青年はデスクの上に頭をのせ、ぐったりとすわっている。昨夜もまた世界の大激変を味わったあと、夜明けにこの役所へやってきたのだ。髪はまだとかしてないし、ズボンはだぶだぶ。手にはしわくちゃになった二十ページ分の書類を握りしめている。きょう、ドイツの〈物理学年報〉宛てに郵送するつもりの新しい時間理論である。

さまざまな小さい物音が、町からこの部屋の中に流れこんでくる。牛乳缶が石畳とふれあう音。マルクト通りの一軒の商店で、日除けのクランクが巻きおろされる音。野菜を積んだ荷車がゆっくりと街路を進む音。近くのアパートの中で、男と女がひそひそと話しあ

う声。

じわりと部屋にしみこんできた薄明かりで、どのデスクもまだ眠っている大きな動物のようにくろぐろと柔らかに見える。ぜんぶで十二のオーク材のデスクのうち、その青年のデスクの上だけは半開きの本が散らかっているが、ほかはどれも前日の退勤時のままに、きちんと書類が積んである。もう二時間後に出勤してくる職員たちは、自分がどこから仕事に手をつければいいか、ひと目でわかるだろう。だが、いまの瞬間、この薄明かりの中だと、デスクの上の書類は、壁の隅にかかった時計や、入口のドアのわきにおかれた秘書の腰掛けとおなじように、影に包まれている。いまの瞬間、目に見えるのは、十二のデスクのくろぐろとした輪郭と、背を丸めてすわった青年の姿だけだ。

壁にかかった見えない時計の針は、六時十分を指している。一分また一分が経つごとに、新しい物体が形をとりはじめる。こちらでは真鍮の屑かごが現われる。あちらでは、壁に貼られたカレンダー。こちらでは、家族の写真、クリップの箱、インク壺、万年筆。あちらでは、タイプライター、椅子の上に畳んでのせた上着。やがて、周囲の壁にまとわりついていた夜霧の中から、書棚が出現する。特許関係の帳簿がならんだ書棚だ。摩擦が減るように刃先をカーブさせた新しい掘削器具の特許。供給電力が変化してもつねに一定の電

圧をたもつ変圧器の特許。騒音を除くために低速のタイプ・バーをつけたタイプライターの特許。ここは実用的なアイデアがぎっしり詰まった部屋だ。

外では、アルプスの尾根が朝日に赤く映えはじめる。六月の下旬である。アーレ川では、ひとりの船頭が小舟のもやいを解き、岸から押しだし、流れのままに舟をまかせて、アール通りからゲルベルン通りへ夏のリンゴとイチゴの配達に向かう。マルクト通りぞいの店にやってきたパン屋の主人は、オーブンの火をおこし、小麦粉とイーストを混ぜはじめる。ニーデック橋の上ではふたりの恋人が抱きあい、物思わしげに川面を見つめている。シッフラウベのアパートでは、バルコニーに立った男がピンク色の空を見あげている。クラム通りでは、不眠症の女がのろのろと街路を歩きながら、暗いアーケードを順々にのぞきこみ、薄明かりをたよりにポスターの文字を読んでいる。

シュパイヒェル通りにある細長い特許局の建物の中、実用的なアイデアがぎっしり詰まった部屋の中で、若い技官はまだ背を丸めたまま、デスクの上に頭をのせている。四月の中ごろからここ二カ月あまり、彼は毎晩のように時間と関係のある夢を見てきた。その夢が、彼の研究を乗っ取ってしまった。その夢のおかげで彼はくたくたに疲れ、自分が目を覚ましているのか眠っているのかさえわからなくなるほどだった。しかし、その夢もよう

やく終わった。夜ごと夜ごと想像したさまざまな時間の性質の中で、ひとつだけ心に強く訴えてくるものがある。といっても、それ以外のものがありえないわけではない。べつの世界には、そうした性質の時間が存在するかもしれない。

椅子の上で身じろぎした青年は、タイピストの出勤を待ちながら、ベートーヴェンの月光ソナタを小さくハミングする。

一九〇五年四月十四日

かりに時間が始めも終わりもない円環であるとしてみよう。その場合、世界はその歴史を正確に、かつ無限にくりかえしていくだろう。

大部分の人びとは、自分がおなじ一生をくりかえしていることに気がつかない。商人は自分がおなじ取引を何度も何度もくりかえしていることを知らない。政治家は、時間のサイクルの中で、自分がおなじ壇上からおなじ演説を無限に反復していることを知らない。両親は生まれたわが子の最初の笑い声を、二度とそれを聞けないかのようにいとおしく感じる。はじめて愛をかわす恋人たちは、恥じらいながら服を脱ぎ、しなやかな太腿や可憐な乳首に驚きを示す。そのひそかな発見と接触のひとつひとつが、これまでとまったくお

なじように、これからも果てしなくくりかえされることを、どうしてこのふたりがさとるわけがある？

マルクト通りでもそれはおなじだ。どの手編みのセーター、どの刺繍入りのハンカチ、どのチョコレート・キャンディ、どの精巧な羅針盤や時計も、いずれはまたおなじ店先にもどってくることが、どうして商店主たちにわかるだろう？　夕暮れになると、商店主たちは家族の待つ家に帰ったり、居酒屋でビールを飲みながら、アーケードを歩く友人たちに陽気な声をかけたり、その一瞬一瞬を、まるで委託販売のエメラルドを扱うように、たいせつに撫でさする。なにごとも一時的ではなく、すべてはまた起こることが、どうして彼らにわかるだろう？　それはクリスタルのシャンデリアのまわりを這う一ぴきの蟻が、いずれは出発点にもどることを知らないのとおなじようなものだ。

ゲルベルン通りの病院では、夫を見舞いにきた妻が別れを告げようとしている。夫はベッドに横になったまま、うつろな目で妻を見あげる。この二カ月で、夫のガンはのどから肝臓へ、膵臓へ、さらには脳へと転移した。ふたりの幼い息子は、病室の隅にあるひとつきりの椅子に腰かけ、父親のこけた頬と老人のようにしなびた皮膚をおびえた目でながめている。妻がベッドに近づいて、夫のひたいに優しくキスをし、さよならをいい、子供

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たちを連れて足早に去っていく。妻はそれが最後のキスだと信じている。どうして彼女に真実を知るすべがあるだろう？　時間がもう一度もとにもどり、また彼女が生まれかわり、またギムナジウムでまなび、チューリヒの画廊で自作の絵を展示し、またフリブールの小さい図書館で夫になる男と出会い、七月の暖かい一日にトゥーン湖で彼とヨットに乗り、また子供を生み、彼女の夫がまた製薬会社で八年間働いたあと、ある日の夜、のどにつかえるものを感じて帰宅し、また嘔吐し、しだいに衰弱して、この病院、この病室、このベッドで、この瞬間を迎えることを。どうして彼女にそれを知るすべがあるだろう？

時間が円環である世界では、あらゆる握手、あらゆるキス、あらゆる誕生、あらゆる言葉が、きっかりおなじようにくりかえされる。そして、ふたりの友人が絶交する瞬間も、金が原因でひとつの家族が崩壊する瞬間も、夫婦のいさかいで吐かれる毒舌のひとことひとことも、上司の嫉妬で潰えたあらゆる機会も、守られなかったあらゆる約束も。

すべてのことが未来でまた反復されるのとおなじように、いま起こっていることは、これまでに百万回も反復されてきた。このすべてが過去にも起こっていると夢の中でおぼろげに気づいた人びとは、どこの町にも少数ながらいる。その人たちは不幸な生涯を送る。彼らは自分の判断の誤りや、愚行や、不運が、すべて前回の時間のサイクルの中でも起こ

ったことをうすうす勘づいている。これらの呪われた市民は、真夜中にベッドの中で寝返りをうちつづけるため、休息もとれず、たったひとつの行動、たったひとつの身ぶりさえ変えられないという認識につきまとわれる。彼らの過失は、以前の人生とおなじように、この人生でもくりかえされるだろう。そして、時間が円環であるという兆しは、こうした二重に不幸な人びとからしかうかがえない。どの町でも、夜更けになると、人けのない街路やバルコニーは、こうした人びとの嘆息にみたされる。

一九〇五年四月十六日

この世界では、時間が水の流れに似ており、崩れた岩石の破片や、一陣の突風で、その流れが変わることがある。ときには、なにかの宇宙的擾乱(じょうらん)で時間の小川が本流からそれ、川上につながることもある。そんな現象が起きると、枝分かれした細流にとらえられた鳥たちや、土くれや、人びとは、とつぜん過去へと運ばれてしまう。

時間をさかのぼって過去へ運ばれた人びとは、すぐにそれと見分けがつく。目立たない地味な服装をして、足音ひとつ立てないようにこっそり歩き、草の葉ひとつさえ踏みつけまいとしているからだ。自分が過去でなにかの変化を生みだせば、それが思いもよらない結果を未来にもたらすのではないか、と恐れているからだ。

たとえば、いまもそんな人物がひとり、クラム通り十九番地のアーケードの暗がりにうずくまっている。未来からの旅人の居場所にしては奇妙だが、とにかく彼女はそこにいる。道行く人びとは、そばを通りかかり、つかのま彼女を見つめたあと、そのまま歩きつづける。片隅にうずくまっていた女は、足早に通りを横ぎり、こんどは二十二番地の暗がりにしゃがみこむ。彼女は土ぼこりを巻きあげることさえ恐れている。

一九〇五年四月十六日のこの午後、ペーター・クラウゼンという男が、シュピタール通りの薬局に用があって、ちょうどそこを通りかかる。クラウゼンはおしゃれな男なので、衣服がよごれるのをひどく嫌う。服がよごれると、約束をした相手を待たせておいても、立ちどまっててていねいにほこりをはらうような男である。もしそんなことでクラウゼンがあまり手間どっていると、ここ何週間も脚の痛みを訴えている妻にたのまれた軟膏を買う時間がなくなるだろう。すると、クラウゼンの妻は機嫌をそこね、レマン湖への旅行をとりやめるといいだすだろう。もしクラウゼンの妻が一九〇五年六月二十三日にレマン湖へでかけなければ、その日たまたま湖の東岸の桟橋を歩いていたカトリーヌ・ド・エピネに出会わず、ド・エピネ嬢に息子のリヒアルトを紹介する機会もないだろう。その結果、リヒアルトとカトリーヌは一九〇八年十二月十七日に結婚しないだろうし、一九一二年七月

八日にフリードリヒが生まれてはこないだろう。そして、フリードリヒ・クラウゼンは一九三八年八月二十二日にハンス・クラウゼンの父親にならないだろうし、ハンス・クラウゼンが生まれてこなければ、一九七九年のヨーロッパ連邦誕生も日の目を見ないだろう。

いきなり過去のこの時間、この場所へ押しやられ、いまクラム通り二十二番地の暗がりでひたすら目立つまいとしている女、未来からきた女は、クラウゼンの物語と、これからくりひろげられるだろう無数の物語が、子供たちの誕生や、街路での人びとの動きや、ある一瞬の小鳥のさえずりや、正確な椅子の位置や、風の吹きかたに左右されることを知っている。彼女は暗がりにうずくまり、人びとに見つめられても視線を返さない。そこにうずくまったまま、時の流れが自分をもとの時代へ運んでくれるのを待っている。

未来からの旅人は、口をきかなければならない羽目になっても、なにもしゃべらず、哀れっぽい鼻声、小さい苦しげな声を出すだけである。旅人は悩んでいる。もしほんのわずかでも過去のなにかを改変すれば、未来が破壊されるかもしれないからだ。そして、どんな出来事にも参加できず、それを変えることができないのに、いやおうなくその結果を目撃しなければならないからだ。旅人は自己の時代に生きている人びとをうらやむ。未来のことをなにも知らず、自分の行動がどんな結果を生むかを知らずに、おのれの意志のまま

に行動できる人びとを。だが、未来からの旅人は行動できない。彼らはいわば不活性ガスであり、幽霊であり、魂のない経帷子(きょうかたびら)である。旅人は人格を失っている。時間の流刑者である。

未来からきたみじめな旅人たちは、どこの村でも、どこの町でも目につく。彼らは建物のひさしの下や、地下室や、橋の下や、人けのない野原に身をひそめている。これから起こる出来事について、未来の結婚と、出生と、経済と、発明と、金儲けの方法について、彼らに質問するものはない。旅人たちはそのまま放任され、同情を寄せられている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com